

イギリスの大学における質保証システム —教員能力基準と評価を中心に—

武村 秀雄

【要旨】

1980年代、イギリスの高等教育機関への進学率は15%に留まっていたが、その後の高等教育政策・行政の積極的な取り組みで1990年代には30%を超えた。21世紀の更なる拡充・拡大を促進するために、基本的な施策（進学機会の充実、財政の改善、研究環境整備、産学連携強化）を打ち出したが、その中でも「教授・学習（修）活動の質的向上」を強調した。同時に、大学教育機関の質保障の維持及び向上に関する一連の政策、特に1990年代以降の自己点検・評価を踏まえた分野別及び機関別評価を導入した。具体的な政策として、2006年の高等教育教員の専門職能開発と教育活動の質保障担保のため「教員教授能力基準」を提示し、研修プログラムとして活用を期待した。さらに、2011年、高等教育アカデミー（HEA）により訂正が加えられ、「全英高等教育専門職能の基準枠組み」の提示により広汎な分野に活用可能となる。これらの基準は各教育機関において教員評価の展開に繋がっている。

キーワード：資格、受益者負担、質保証、専門職能開発、教員評価

はじめに

第二次世界大戦後、イギリス政府は教育改革を最重要課題の一つとして取り組んできた。高等教育について、1963年ロビンズ報告：Robbins Report(保守党政権下)は大学の制度的な拡充・拡大（学生数を10年間に2倍に）及び経済格差によらないアクセスの平等化政策を打ち出した報告書である。この勧告は高等教育にとって戦後最初のターニングポイントと位置づけられる。

その後、保守・労働両党は高等教育の発展に関する政策を次々に打ち出した。特に、20世紀末の経済状況及び来る21世紀の知識基盤社会、知識主導型経済における国際競争激化到来の中、専門職業人の人材育成は必須の課題であった。高等教育の現状である「マスプロ」から「ユニバーサル化」ステージを目指すことは自明の理となったが、実際、1990年頃までイングランド高等教育はエリート段階であり、授業料を無料にするどころか、生活費支援（給付制奨学金）政策をとっていた。

1988年以降、ポリテクニク（高等教育機関）等の大学への昇格の影響もあって、1990年代に急速に拡大した高等教育に向けた新たな政策が必要となった。そこで、1997年の「デアリ

ング報告」(21世紀の高等教育の将来)は高等教育の拡大を一層推進するとともに、それに応じた拡充策として財政改革が必要となることから授業料の導入等を提言した。更に、画期的な提言として、高等教育の質の維持と保証における教育内容や教授法の改善及び教員の能力向上を求めた。高等教育政策において、それまで必ずしも重視されなかった「教授・学習」(teaching and learning)に注目した点でも画期的な勧告であった。この「デアリング報告」を受けて、専門職向上の取り組みとして、教員能力基準(教員研修プログラム開発)への勧告がなされ、各高等教育機関は「教員評価システム」を取り入れていくことになる。更に、後出の高等教育白書「高等教育の未来」(2003年)で専門性を開発するプログラム基準の作成を促した。

拙稿では、大学教員の専門職向上に向けた基準と具体的な指針である2006年「高等教育教員教授能力基準の策定」の内容の提示をし、さらに、大学内の質保証に資する教員評価の具体例を提示する。ただし、教員能力向上と評価の推進政策の理解を深めるために、大学の入り口と出口の概観紹介に、かなりの紙面を割く必要がある。

1. 大学進学に必要な資格

1) GCSEの意味と意義

先ずは、英国の教育(初等・中等教育機関)には卒業という考え方はない。当然ながら、卒業証書も存在しない。あるのは、「中等(義務)教育修了証書」と「Aレベル証書」という名の資格である。大学進学を目指すには義務教育[義務教育は5歳～16歳、計11年]修了後、Sixth Form(中等教育後期課程:第6年学級)に進学するために、全国統一試験である「GCSE」(General Certificate of Secondary Education)(義務教育修了一般資格)(8～10科目を受験、A～Gのグレード評価)を受験する必要がある。

因みに、このGCSEを2015年度から大幅に変更する予定で保守党は抜本的な改革計画を立てたが、結果的に大なる後退を余儀なくされた。しかしながら、2015年度から実施可能な改革として、「11年生の学年末に受験一回限り、主要科目のコースワーク廃止、採点基準が上がる、構成内容はイギリスの伝統的価値観を強調」とすることは採択されている。これまで「イングリッシュ・バカロレア」を導入し、GCSEを廃止する計画が何度も浮上してはつぶれ、その度に国民は振り回されてきたという不信感も拭えない。その経緯についてはweb site(BBC News Education & Family: Planned switch from GCSEs to Baccalaureate in England 'abandoned')を参照されたし。

2) GCE・Asレベルの持つ意味

GCSEの後、大学進学希望者は一般的にSixth Formと呼ばれる2年課程教育機関(中等教育後期課程)に進学し、基礎科目や専門科目を進学希望の大学の専門分野と入学条件に合わせてGCE・AS/A2(General Certificate of Education, Advanced Level)(大学入学資格試験)レベルの科目を選択する。1年目の終わりにASレベルの試験を受け、A2レベルの科目を決定するが、通常履修に3～5科目に絞り専門的に学習する。2年次に全国統一試験である「GCE・A2レベル」を例年6月に受験し、8月の中旬に結果(A～Eのグレード評価)が公表される。

2014年度は30万人が大学進学資格を取得したと報じられたが、この人数は多いのか少ないのかの検証はできていない。因みに、1年次末にGCE・ASレベルを受けることも可能であるが必須ではない。特筆すべきは、現時点でSixth Formの過度な専門化について生徒が幅広い知識や技能を身に付けるうえで阻害要因となっているとの批判も無視できない。

これらの資格試験は個人の能力伸張が目標であると考えられており、試験自体に比重を置いている点に特徴を持つ。本来の目的、特にGCE・Aレベル試験は大学進学のための位置づけではなく、中等教育修了資格としての意味合いがあることを忘れてはならないと強調されている。履歴書にも資格として記述するようである。しかしながら、実態としてGCSE、SCE・Aレベルの試験の成績は、大学進学への必須条件であり、大学からの学位とそれに付される成績と同様に、生涯有効な資格とされている特異な制度であるといえる。結果的にはイギリス社会で「資格アイデンティティ」として通用している現状がある。

2. 大学への入り口

1) 審査基準

現在のイギリスの大学数は100校(総合大学)ならず、1校(Univ. of Buckingham)を除いてすべてが国立(王立)である。しかしながら、UCAS(Universities and Colleges Admissions Service)の基準では325校となっている。各大学の専攻分野の研究・教育内容に関するランキングは意図していないが、評価したものを公表している。(NISS: National Information Services and System 参照)

ラッセル・グループ(24研究型大学)、ロンドン大学連合など、それぞれの審査基準がある。イギリスの旧大学のトップはやはりOxford大学、Cambridge大学であり、19世紀の間に、教養教育自体の概念に変化が生じ始め、学問領域の重視は大学ごとに異なり、それが伝統として受け継がれている。2大学は教養教育中心のカリキュラムから脱却して専門分野教育の拡充・拡大への改革に相当な議論と時間を要した。しかしながら、現在でも伝統的にOxford大学では古典学を、Cambridge大学では純粋数学を重視している。Cambridge大学では18世紀末以降の学位試験制度に数学試験を優先し、重要視されてきたようである。現在でも、この旧2大学Oxbridgeでは「GCE・Aレベル」以外に大学の試験と面接があり、各々の大学伝統が読み取れる独自性を出しているようである。William Whewell(1837)はこの2旧伝統大学の教養教育内容の重要性と必要性を理念的に分析している。イギリス高等教育研究の基礎文献の一冊であり、時代背景としてエリート段階どころか、「貴族主義教育」のステージを意識して読み解くと実に説得力のある良書である。

2013年10月23日にCambridge大学の面接試験の内容(一例だと推測)が公開された。これは、口頭試問と書かれているが、メモをとって良いのか否かは明示されていない。一見したところ、算数レベルかと思いきや、図らずも高等数学であることが判明した。面接内容から純粋数学を重視している証左である。(資料参照)

各大学において入学を許可する権限は有しているが、「選抜」という考え方は存在しな

いことを特筆したい。独自の考え方として、Sixth Form を修了しているか否かは関係なく、GCE・A レベルの資格または IB(International Baccalaureate) 取得が第一要件となる。大学のアドミッションズでは書類審査を通して、入学の合否を決定するが、教員にも判断を求めるケースもあるようである。通常、一人平均 4～5 大学に入学申請することから、定員枠に対する合否の判断(足切り)が毎年苦慮するようである。他方、2000 年に「職業 A レベル：AVCE」が導入されたが、2005 年から「GCE・A レベル応用科目」と称され、近年では、社会人を含む下位の社会階層出身者からの進学拡大のため、職業教育資格取得者の入学など進学ルートが多少なりと多様化してきている。因みに、イギリスは 9 月から新年度であるが、入学式というものがない。

2) 授業料の受益者負担原則の確立

1998 年度から授業料 £1,000 の徴収を開始し、2006 年度から £3,000 (上限) まで授業料を課すことが認められた。その後改革が進み、2012 年度からは大幅な財政政策を打ち出した。大崎 仁はこの改革の骨子は、「授業料は国が肩代わりして大学に支払い、学生は卒業後所得に応じて国に返済する(大崎 2012：日本経済新聞)。」ことになり、卒業後 £21,000 以上の年収を得る時点から返済が始まる。卒業後、30 年間で完済できない額は返済義務が消滅する。これは卒業生や修了生は大学教育の受益者であり、その利益を得る収入と考えることができる。つまり、受益者負担という考え方が明確にされている。

更に、大崎 仁は、この改革(学生中心のシステム)には(大崎 2012：日本経済新聞)、もう一つの重要な特質があると述べている。それは、大学教育機関間競争を促進し、そうすることで教育の多様化と質の維持・向上を図るシステムにつながることでありと分析している。

3. 授業、単位、成績

イギリスの大学には一般教養課程はなく、3 年間専門分野の学修となる。このカリキュラム構成から、大学のレベルが高いという評価の要因となっているが、一方、繰り返しになるが、Sixth Form 課程において、専門分野に関わる年齢が早すぎるとの根強い批判もあることは無視できない。

授業形態はレクチャー(大教室)、セミナー(少人数教室)、そしてチュートリアル(tutorial: 担当教員から指導を受けながら独自に学習を進める)がある。履修として、それぞれの学部で提供されている科目がモジュール制になっており、コア・モジュール(必修科目)、オプション・モジュール(選択科目)でクレジット(単位)を計算して進めていく。試験は一般試験と事前に問題が公開される試験がある。一般的に、80% 以上(High First)、70% 以上(First Class)、60-69%(2.1)、50-59% (2.2)、39%(Fail) というスケールがあり、70% 以上が A であり、60% 以上が B、39% 以下が不合格となる。しかしながら、試験の採点は大学の教授の一任ではなく国の機関へ一旦送られ、不正が無く公平に採点される仕組みになっている。(London Study Abroad Centre: ロンドン留学センター)

4. 学 位

大学のBachelor学位は 修了試験の結果に応じて、所定の成績を収めた者に優等学位（より専門化した、高度な水準）があり、優等学位の水準に達していない者に普通学位が授与されるのが一般的である。更に、優等学位そのものにも1級、2級（2級の上または下、division 1 or 2）、3級の4段階の区別があり、普通学位と合わせて学生の達成度を重視した学位の序列（degree classifications）を表している。当然、1級と2級の上以上でないと大学院の受験資格も無く、就職も一流企業はそこまでのランク者しか雇用しないという不文律は確立しているようである。イギリス社会では一生その成績はついてまわるといふ、厳しさがある。（The Student Room）

至近な例として、政治家は大学の学位（公開の義務があるとか）における1級（あるいはそれに順する2級の上）を取り損ねた者はその資質を問われる場合がある。また、資格・（最終）学歴による賃金格差は大きく、差別もあるといえるが、社会人がGCE・A レベルの勉強をして大学に入学しなおし、学位を習得したり、成人後に技師や医師や弁護士などの資格取得に挑戦したりすることも比較的容易である社会及び大学文化は評価できるのではないだろうか。

5. 学習成果の重視

イギリスでは高等教育の質保証に関する考え方として、「研究評価」を質保証には含めない。つまり、大学評価と同列ではないという普遍的な共通認識がある。質保証とは教育、「教授と学習」に特化している。大森不二雄は「質保証システムと学習成果アセスメント」について整理しているので（大森 2012:75）要約すると、全国的な制度・政策として学習成果重視の質保証システムが構築されており、国家レベルの事業として学習成果に基づく質保証の先進事例と言って差し支えない。学位課程の構成要素（カリキュラム、教授法、評価法等）を「システムの統合」することである。学習成果を生み出すことこそ重要であり、評価はその手段の一部にすぎない。

更に、大森は学習成果に関する用語、特に「エンプロイアビリティ」（就業力）は、盛んに用いられているとし、高等教育におけるエンプロイアビリティの育成が政策課題として取り組まれており、各大学での実践事例も豊富であるとしている。「学生の獲得するものを最大化するには、ジェネリックな能力を、アカデミックな文脈の中に位置付けられなければならない」、「学問を基盤としたエンプロイアビリティの育成」という理論枠組みを示していると言える。また、実践面でも、プログラムごと又は全学的なカリキュラム全体モデルの取組も見られる。すなわち、エンプロイアビリティの育成に関しても、「システムの統合」の考え方が活かされていると評価している。

6. 分野別評価から機関別教育評価へ

1988年、教育改革法（Education Reform Act）によって大学補助金委員会（UGC）を廃止し、総合大学財政審議会（University Funding Council: UFC）を設立。国庫補助金の配分を

通じての総合大学の経済、社会の要請に即応した教育、研究の促進、効率化を図っている。1993年には、イングランド高等教育財政審議会（Higher Education Funding Council for England）（以下、HEFCE）として一本化し、評価も担っていたが、1998年からは「高等教育質保証機構」（Quality Assurance Agency for Higher Education）（以下、QAA）に引き継がれた。QAAは、1997年に政府と英国大学協会（UUK: Universities UK）等によって共同で設立された非営利法人である（大森 2012：76）。

高等教育機関による「内部質保証」（internal quality assurance）に対するガイドラインとして、「アカデミック・インフラストラクチャー」（Academic Infrastructure）と呼ばれる参照基準のセットが、QAAによって開発・提示され、法的拘束力はないものの、事実上の規制力を持った規範（ソフト・ロー）として機能している。

QAAによる教育評価の基本的方針；評価課程において、機関による内部審査（internal review）を基本としつつ、QAAによる外部検査（external scrutiny）を実施し、両者の有機的な共同事業とする。2006年の評価活動の指針として、機関監査によること、学生の意見重視、大学院プログラム等を評価するが報告書公表まで含む監査期間を短縮すると明言している。詳細は（大学評価・学位授与機構 2010：5、33-9）参照されたし。

イギリスの大学における高等教育の基準を守り、質の向上を目指す品質保証機関で「第三者評価」に近いものを、大森不二雄は次のように整理している。（大森 2012：76）

1993年に「質アセスメント」（Quality Assessment）という名称で導入され、1995年には「分野別レビュー」（Subject Review）と名を変え、評価方法等に変更もあったが、いずれも分野別教育評価であり、分野別レビューは2001年まで継続された。大学や教職員の負担が大きく、評価疲れも指摘されるとともに、専門分野ごとの評価という大学教員にとって最も身近なレベルで自律性への脅威を感じさせるものであったこともあり、2002年以降は、「機関監査」（Institutional Audit）と称する機関別教育評価に取って代わられた。評価方法等の詳細は省略するが、分野別評価と機関別評価のいずれも、基本的に自己評価を踏まえたピア・レビューである。

7. 質保証の基本的概念

「外部質保証」（external quality assurance）システムは、以下の4つの施策によって構成されている。（Universities UK, 2008a）

- ① 高等教育機関の教育評価：機関別評価に転換
- ② アカデミック・インフラストラクチャー（Academic Infrastructure）：高等教育機関の内部質保証のガイドライン
- ③ 教育情報の公表：大学の成果指標と各課程情報
- ④ 「全国学生調査」：最終学年満足度を含む質問紙調査（questionnaire survey）

「内部質保証」は、日本でいう「自己点検・評価」よりも広義の概念があり、前述の②

のアカデミック・インフラストラクチャーのガイドラインは以下の4つから構成される。(Universities UK, 2008b)

- ① 質の維持のための「行動規範」(Code of Practice) (グッド・プラクティスのガイドライン)
- ② 学位等の共通性を担保する「高等教育資格枠組み」(Frameworks for Higher Education Qualifications)
- ③ 学問分野別の知識・能力等とその実現のための教授・学習・評価並びに学位に要求される能力等のベンチマーク基準を設定した「分野別ベンチマーク・ステートメント」(Subject Benchmark Statements)
- ④ 課程修了者に期待される学習成果と達成手段等について、大学が各課程「プログラム仕様書」(Programme Specifications)

8. 高等教育教員の専門職能開発と教育活動の質保証

1) 高等教育の将来

1997年「デアリング報告」(Dearing Report) (通称) でフルタイムの新人教員は、ILTHE (高等教育改善機関) の準会員資格を取得すべきと勧告された。日本の文部科学省 (2003) は2003年英国高等教育白書「高等教育の将来」の「3. 教授・学習活動の質的向上 高等教育教授適格基準の設定」を次のように翻訳している。「高等教育教員に求められる専門的教授能力を示す高等教育教授適格基準 (professional standards for teachers in higher education) を2004年に設け、2006年以降新教員はその基準に沿った能力証明を得るものとする。」

更に、文部科学省は2004年「高等教育アカデミー」(Higher Education Academy) (以下、HEA) 設立の経緯、特に目的について、「教授と学習の改善を目的に、教授、学習そして評価に関する取組を通して、スタッフの専門性の向上と学生の修学を支援している (文部科学省 2010: 112)。」と記述している。

2) 高等教育教員教授能力基準計画 (2006年、2011年)

2006年「高等教育の将来」の提案を受けて、全英大学協会 (UUK)、高等教育アカデミー (HEA)、他、は National Professional Standards Framework for Teaching and Supporting Learning in Higher Education (高等教育教員教授能力基準: 文部科学省訳) (以下、NPSF) をまとめた。基本的基準は次の3項目に集約されている。

- ① 教授・指導水準: Area Activity undertaken by teachers and supporters of learning within HE
- ② 高等教育教員として備えるべき知識や理解: Core Knowledge that is needed to carry out those activities at the appropriate level.
- ③ 専門職としての姿勢: Professional Values that someone performing these activities should embrace and exemplify.

この2006年の基準策定は教授能力及び学習支援能力向上を意図した全国基準であり、各高等教育機関の研修やFDなどでの活用を期待された。画期的な基準であると評価されたことも確かである。

2011年、高等教育アカデミー(HEA)は内容の訂正(2006年度版)を加えて「The UK Professional Standards Framework (UKPSF) for teaching and supporting learning in higher education」(以下、UKPSF)を公表した。この「基準枠組み」を加藤かおりは「(英国)全英高等教育専門職能の基準枠組み」と訳している(加藤 2011:44)。この教授と学習の向上支援の枠組みの提示により、大学教育機関の幅広い専門分野に応用可能な基準枠組みであり、単純な「基準」の提示ではないと強調されている。この「基準枠組み」は以下のように5対象となっている。(HEA: UKPSF 2011:2)

- ① 教育と学習支援活動にかかわる新任及び現職教員の専門職能の向上を支援
- ② 多様なアカデミック又は専門分野での創造、改革、継続的発展を通して活動的な教育活動の促進
- ③ 教育や大学は専門職能力を学生や保護者に証拠提示
- ④ 教育活動の多様性、質、及び学習支援や補強実践評価の明示
- ⑤ 教育活動のみならず研究及び管理・運営責任を伴う教員と大学で公式に認識されたアプローチこそ、質の高い専門職能の更なる推進のために促進

3) 基準の枠組み (Dimension of the Framework)

(1) 5 活動領域 (5 Areas of Activity) (HEA: UKPSE 2011:3)

- A1 学習活動と研究プログラムのデザインとプラン (Design and plan learning activities and/or programmes of study)
- A2 教授及び／又は学習支援 (Teach and/or support learning)
- A3 成績評価と学習者へのフィードバック (Assess and give feedback to learners)
- A4 効果的な学習環境、学生支援・ガイダンスの開発 (Develop effective learning environments and approaches to student support and guidance)
- A5 専門分野の科目と教授法の継続的な専門職能開発を学問、調査研究及び専門的実践的活動の評価を統合 (Engage in continuing professional development in subjects/ disciplines and their pedagogy, incorporating research, scholarship and the evaluation of professional practices)

(2) 6 コア知識 (6 Core Knowledge)

- K1 担当科目内容の専門的知識 (The subject material)
- K2 科目領域とアカデミックレベルでの適切な教授・学習方法 (Appropriate methods for teaching and learning in the subject area and at the level of the academic programme)
- K3 学生は一般科目として学習するのか、専門分野科目として学習するのか、いかに学習するか (How students learn, both generally and within their subject/ disciplinary

area(s))

K4 適切な学習テクノロジーの利用と意義 (The use and value of appropriate learning technologies)

K5 教授方法の効果の評価方法 (Methods for evaluating the effectiveness of teaching)

K6 教授におけるアカデミックかつ専門職業的な実践力向上の質の保証と質の強化の意味 (The implications of quality assurance and quality enhancement for academic and professional practice with a particular focus on teaching)

(3) 4 プロフェッショナル価値観 (4 Professional Values)

V1 個々の学習者と学習コミュニティの多様性を尊重 (Respect individual learners and diverse learning communities)

V2 高等教育への参加と学習者の機会均等を推進 (Promote participation in higher education and equality of opportunity for learners)

V3 エビデンス情報に基づくアプローチ、及び研究、学問及び継続的専門的職能開発によるアウトカムズを活用 (Use evidence-informed approaches and the outcomes from research, scholarship and continuing professional development)

V4 広汎な高等教育機能と環境を認め、専門的職業実践における意義と影響を認識 (Acknowledge the wider context in which higher education operates recognising the implications for professional practice)

(4) ガイダンス・ノート

高等教育アカデミー (HEA) はこの UKPSF(2011) の有効利用を目指して、「ガイダンス・ノート」を作成し、ダイナミックな開発推進を意図しているものである。更に、これらの基準枠組み内容については教育活動現場の要望に応えるため拡大及び修正する用意はある。ガイダンスは以下のように提示されている。(HEA 2011 : Framework Guidance Note 1)

The Guidance Notes answer the following questions:

1. (基準枠組みとは何か) What is the UKPSF?
2. (記述形式とは何か) What are the Descriptors?
3. (範囲とは何か) What are the Dimensions?
4. (いかに枠組みの変更がなされたか) How has the Framework changed?
5. (枠組みをいかに使うか) In what ways can the Framework be used?
6. (基準合格、認定) Accreditation

(上記のガイダンス・ノート2～6の詳細については引用(参考)文献の〔HEA: Framework Guidance Note 2-6〕のURLを参照されたい)

4) プロフェッショナル認定

現在のイギリスでは2006年「高等教育の将来」の提案、NPSF以降、大学教育のプロフェッショナル化が進んでいる。つまり、大学教育職としての専門職能力向上及び開発であり、教育政策として大学におけるティーチングと学習支援 (for teaching and supporting learning

in higher education) のプロフェッショナル認定である。加藤かおりは英国の大学教員の認定のプロセスを簡潔に提示しているので、以下に要約する。(加藤 2012 : 259-60)

大学教員中心にその教育スタッフとして、その責任を果たすための能力を証明することを支援する仕組みである。認定方法の原則として、「UKPSF」に基づいて本人が教育職能開発を実践した経験及び成果はエビデンスをもって証明する文書を「HEA」に申請し、HEA 会員登録をする。エビデンスをもって証明する方法には3方式がある。1に、所属大学がHEAの認定を受けた「教授資格証明取得の教育課程：Postgraduate Certificate in Higher Education」を修了することで、HEAへの会員新申請の資格が取得できる。2に、HEA提示のUKPSFを基に、本人が能力証明を実施し申請する。3に、HEAが優れた教員に授与しているティーチング・フェロースhip制度でフェロー又はフェロー候補となることをもってHEA会員に登録される。

9. 教員評価の事例

1) Personal Development Review System

Oxford Brookes University (以下、OBU) の教員評価は「the Personal Development Review system」(以下、PDR) という「自己点検・評価」に極めて近い方法で実施している。以下に基本的なPDR systemの流れを提示する。

- ・ PDR用紙(OBU:2011a参照)に教員が記述作成し、PDR評価者(reviewer)は面接試問の一週間前に提出する。
- ・ 面接中、教員と評価者はフォームの記述内容について討論し、さらに評価者は教員の職業上の過去、現在、未来にわたる領域まで活発に展開する。
- ・ 面接試問の結果により、フォームの再提出を求めることもある。
- ・ 評価者はコメント欄に所見を記述・署名してコピーを当該教員に返却する。かつ学科長にもコピーを提示する。
- ・ 全教員のPDRフォームを整理して、学科単位で共通問題を見出すが、それが微細であろうと大事であろうと、改革の方途を探究する。通常、それらの問題・課題が学科を超えた課題である場合はFaculty Executive、Human Resources及び、大学上層部にあげる。

OBUのDirectorate Human Resources(以下、DHR)からPDRの記述用のガイダンスPersonal development review guidelinesが次のURLに詳細が提示されている(OBU 2011b : DHR)。更に、教員職用と事務員職用両PDRフォームがガイダンス等とともに面接試問やcode of principle、補足情報などの詳細が提示されている(OBU 2011c : DHR)。

2) PDRの項目と内容

フォーム・ガイダンスに基づいて以下の7セクションを作成していくのである。(OBU 2011a : PDR Forms)

- ・セクション1 過年度における個人的な活動総括及び査定
- ・セクション2 昨年度のミーティング試問以降、着手した事柄及び継続中の活動、かつ専門職能開発の内容
- ・セクション4 評価者のコメントと勧告
- ・セクション5 次年度の目標
- ・セクション6 次年度の業務上目標達成及び専門的職能開発に関する具体的な方途の明示
- ・セクション7 レビュー面接暫定日

この年度末(6月中旬)のレビューについて、1学科長にインタビューすることができた。先ず、レビュー体制について以下のような前向きなコメントがあった。

通常、管理者は9～10人の同僚教員のPDR業務を受け持つ。これらの会合は対面方式で1対1で1時間実施される。この作業は全教職員に義務付けられている。理想的には、6月の末までに全ての業務を完了すべきである。年度末休暇、夏期調査研究や学会出張などの前に毎日実施されるべきだと思っている。

更に、取り組むべき姿勢を以下のように強調している。

経験上、reviewee、reviewerともに単なる強勢された書類提出処理ではなく、全力投球すべき極めて有意義なものである。我々にとっては、これらの書類やレビューを通して学科の発展と運営に結びつくことの意味は大きい。このプロセスは必須であると信じている。

注意点として、Research-active staff(研究開発教員)については、5年計画のPersonal Research Planning (PRP)の提出を求めるが、毎年評価対象となり数時間にわたる作業量計画を提示する。もちろん、PRPとPDRは連動している場合もある。

3) 一般教員の反応

夏期休暇に入る直前(6月中旬)、研修のホスト校であったOBU大学では学位授与式が1週間続いた。この大学は4 Facultiesの中に11 Departments、6 Schools、1 Institute、計18プログラムあるので、1日3回で月から土曜日まで、計18回の授与式が執り行われた。つまり、学長は18回祝辞のスピーチをして全員と握手して、一人ひとりに声をかける。等級別の学位の取得に対する努力に敬意を表するという意味合いが強いのではないだろうか。しかしながら、問題も指摘されている。Mid-term breakがあり、試験期間が一週間以上もあり、その上学位授与式が一週間あるので、授業は実質12週間しかないので学生に申し訳ない、と多くの教員が感じていることは確かのようなのである。そこで、「単純に夏休みが長すぎるのでは」と苦言を呈したところ、明らかに無視された。

この授与式の週にレビュー面接が実施されていたようである。レビューと言いながらも、教授及び学習支援の質保証及び専門職能開発と社会の要求に応えるため、現在の教員評価で

あると捉えているので、書類書きが膨大な量になるという声もかなりあった。一方、数人の教員は年度の反省と次年度の計画が教授・上級講師との面接でしっかりと確認できる良い機会であると、前向きにとらえるべきだと主張する教員も少なくなかった。厳格な教員評価であって当然であると、強調していたことに感慨深いものがあった。しかしながら、昇進、テニューア取得及び給料などに、いかように反映、影響するのかの質問に対する返答はなかった。教員としての資質及び能力に問題が認められる場合は次項のような対応手段をとるようである。

4) レビュー結果より不適格な教員への対応

学科長、上級講師教員に不適格な大学教員への管理者としての対応を尋ねた。当然ながら、大学教員としての不適格の範囲を教育・研究、特に教授と学習支援における専門職能力に限定することにした。要約すると、過去に不適格であると判断せざるをえない教員は数人存在したことは事実である。ただし、アカデミック分野は特殊な面が多々あり、民間業種のように一言で退職の勧告はできない。よって、書類などの再提出を求めるところから始め、学期中定期的に当該教員と会合を持ち、是正改善を促し、具体的な改善策や方途を厳格に要求する。当然ながら、学科内の同僚評価、管理者評価、学生評価など多くの情報に基づいて発展的な解決に結びつける姿勢が必要である。つまり、かなりの時間を掛ける努力は必須である。結果的に、不適格、不適正な教員は、このたび重なる会合を経ることで、自ら退職の意思表示に繋がっている。

他の上級教員からの対応姿勢と経緯も同じようなものであった。学科長や学部長にあげる前に、当然ながら、書類査定、学部や学科内の業務遂行状況、同僚からの評価、そして、学生からの評価、研究業績など、多くの情報を整理して、当該教員とのミーティングで問題点や課題などを提示するプロセスは必須であるとしている。つまり会合を持ち続けることが肝腎であることを強調していた。やはり、アカデミックな特殊な社会であるという意識が強く、1 大学 (Univ. of Buckingham) を除き、大学は国立 (王立) であることから、経歴に負となる記述があると他の高等教育機関への移籍はかなりの困難が伴うようである。ゆえに、進退に関する結論は極めて慎重に出すべきであるとの共通認識があることは確認できた。

おわりに

1990 年代に大学教育機関はマーティン・トロウのトロウ・モデルでいうエリート段階からマス段階 (準制約的：制度化された資格等) に入り、財政的及び政策対応が必要となる。それにもまして、学生の増加にともなう課題として、高等教育機関の質の維持と保証における教育内容や教授法の改善、特に教員の専門職能向上、開発が喫緊の課題として浮上する。更に、2000 年以降、社会人や下層階級の入学拡大を促した「職業 A レベル」及び旧ポリテクニック校の教員と学生の teaching と learning 間の乖離が問題となっている事実も指摘されている。

質保証のクライテリアとして、あくまでも「教育と学習」に特化、つまり学習成果重視、アウトカムであると明確にしておき、教員評価は重要な手段の一つとしての位置づけである。特筆に値することは、この質保証システム統合を国家政策事業として取り組んでいる姿勢は

先駆的な事例として、大いなる示唆に富んでいる。

全英高等教育専門職能の基準枠組及びガイダンス・ノートは大学教員のプロフェッショナル認定プロセスとして確実に専門職能向上につながると同時に、高等教育アカデミーの会員資格を取得となることから、かなり有効的に機能している。これらの基準を基に、教員評価を実施している大学事例を紹介することができたが、それらの内容やシステムは大いなる示唆を得ることができた。しかしながら、2006年に基準策定があり、2011年に高等教育アカデミー（HEA）による訂正がなされてから7年の実績しかないことから、更なる精査が必要であり、基準の枠組については教育現場に伝えるべく、今後も修正や訂正に向けた姿勢はありと明言している。

引用(参考)文献

- 大崎 仁, 2012, 「英に学ぶ大学改革」『日本経済新聞』6.4, (首都圏版).
- 大森不二雄, 2012, “第4章 英国の大学の質保証システムと学習成果アセスメント” 深堀 總子研究代表 『学習成果アセスメントのインパクトに関する総合的研究《プロジェクト研究 研究成果報告書》』, 国立教育政策研究所 (2012): 72-105.
- 加藤かおり, 2011, 「大学教員の教育力向上のための基準枠組み Standards Frameworks for Professional Teaching in Higher Education」『国立教育政策研究所紀要』[第139集] 平成22年3月.
- 加藤かおり, 2012, 「英国における大学教育のプロフェッショナル化」『名古屋高等教育研究』[第12号].
- 大学評価・学位授与機構, 2010, 『諸外国の高等教育分野における質保証システムの概要 Overview of the Quality Assurance System in UK Higher Education 英国』
(http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/qa/1191803_1542.html, 2013.9.25)
- 文部科学省, 2003, 英国高等教育白書「高等教育の将来」(The future of higher education) の概要,
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/030301db.htm, 2014.8.11)
- 文部科学省, 2010, 『諸外国の教育改革の動向 Recent Reforms in Education Overseas - 6か国における21世紀の新たな潮流を読む-』[教育調査第140集] ぎょうせい.
- ロンドン留学センター (http://www.london-ryugaku.com/o_card/, 2014.8.20)
- BBC News Education & Family “planned switch from GCSEs to Baccalaureate in England ‘abandoned’”
(<http://www.bbc.com/news/uk-21363396>, 2013.8.23)
- HEA (The Higher Education Academy)・UKPSF, 2011, “The UK Professional Standards Framework for teaching and supporting learning in higher education (2011)”
(<http://www.heacademy.ac.uk/sites/default/files/ukpsf.pdf>, 2013.9.5)
- “Framework Guidance Note 1:
(https://www.heacademy.ac.uk/sites/default/files/downloads/What_is_the_Framework.pdf, 2013.9.12.)
- “Framework Guidance Note 2:
(<https://www.heacademy.ac.uk/sites/default/files/downloads/What%20are%20the%20UK%20Professional%20Standards%20Framework%20Descriptors.pdf>, 2013.10.23)
- “Framework Guidance Note 3:
(<https://www.heacademy.ac.uk/sites/default/files/downloads/What%20are%20the%20dimensions%20of%20practice.pdf>, 2013.11.26)
- “Framework Guidance Note 4:
(https://www.heacademy.ac.uk/sites/default/files/downloads/How_has_the_framework_changed.pdf,

- 2013,12,15)
 "Framework Guidance Note 5:
 (https://www.heacademy.ac.uk/sites/default/files/downloads/Uses_of_Framework.pdf,
 2013,12,28)
 "Framework Guidance Note 6:
 (https://www.heacademy.ac.uk/sites/default/files/downloads/Accreditation_explained.pdf,
 2014,1,16)
- Martin, Trow, 2003. "ON MASS HIGHER EDUCATION AND INSTITUTIONAL DIVERSITY"
 (http://www.oktemvardar.com/docs/PAPER_TROW_Israel.pdf, 2014,7,14)
- OBU : 2011a, "Personal development review"
 (https://www.brookes.ac.uk/services/hr/pdr/form_academic.doc, 2013,5,14)
- OBU : Directorate of Human Resources, 2011b, "Personal development review guidelines"
 (https://www.brookes.ac.uk/services/hr/pdr/form_guidance.html, 2013,5,14)
- OBU : Directorate of Human Resources,2011c, "Personal development review"
 (<https://www.brookes.ac.uk/services/hr/pdr>, 2013,5,14)
- PGCHE: Postgraduate Certificate in Higher Education
 (http://en.wikipedia.org/wiki/Postgraduate_Certificate_in_Higher_Education, 2014,9,8)
- QAA "safeguarding standards and improving the quality of UK higher education"
 (<http://www.qaa.ac.uk/assuring-standards-and-quality>, 2014,6,19)
- QAA "The UK Quality Code for Higher Education"
 (<http://www.qaa.ac.uk/assuring-standards-and-quality/the-quality-code>, 2014,6,20)
- QAA "Code of Practice: Analytic Quality Glossary"
 (<http://www.qaa.ac.uk/assuringstandardsandquality/code-ofpractice/Pages/default.aspx>,
 2014,7,12)
- QAA "The Quality Assurance Agency for Higher Education"
 (<https://www.google.co.jp/#q=UK+QAA>, 2014,7,21)
- The Student Room
 (<http://www.thestudentroom.co.uk/content.php?r=4461-exam-results>, 2014,1,30, 2014,9,3)
- The Guardian: RAE 2008: results for UK universities (Rankings for UK universities in the Research Assessment Exercise 2008
 (<http://www.theguardian.com/education/table/2008/dec/18/rae-2008-results-uk-universities>,
 2014,8,29)
- University UK(2008a) "Quality and standards in UK universities: A guide to how the system works"
 (<http://www.universitiesuk.ac.uk/Publications/Pages/Quality-and-standards-in-UK-universities-A-guide-to-how-the-system-works.aspx>, 2014,8,14)
- University UK(2008b) "Assuring standards and quality"
 (<http://www.qaa.ac.uk/AssuringStandardsAndQuality/AcademicInfrastructure/Pages/default.aspx>,
 2014,8,14)
- William, Whewell, "On the Principles of English University Education" London and Cambridge, 1837.

【資料】

We have selected a selection of interview questions posted online by Cambridge Univ.'s Prof Richard Prager.

Q.1 I start with a pint glass full of lemonade. I drink half of it and give it to you. You then drink half of what is left and give it back to me. I then drink half of what is left, and pass it back. We keep drinking half of the remaining lemonade then passing it across until there is a negligible amount of drink left. In total, what proportion of the pint did I drink?

1/3 5/8 ✓ 2/3 3/4 none of the above

Q.2 On a clear day, you are on an aeroplane which is at 38,000 ft. above the middle of the Pacific Ocean. Taking the radius of the earth as 6,400km, what is the approximate distance between you and the horizon of the earth? (1ft=0.3048m)

130km ✓ 390km 700km 1,300km

Q.3 A helium balloon is held by a light string in the middle of the back of a very powerful truck. The back of the truck is sufficiently large that the balloon cannot hit the sides if it sways forwards or backwards on the string. The back of the truck is completely enclosed with no windows or ventilation from the outside. The truck now accelerates rapidly forwards. What is the motion of the balloon relative to the truck when the truck is accelerating? Does the balloon sway forwards, backwards or remain at the same position?

✓ The balloon sways forwards The balloon sways backwards The balloon does not move

Q.4 My office is 3.5m wide, by 3.5m high, by 7m long. I have 200 books and 7m of A4 size files on the shelves. The office also contains a two-draw filing cabinet, a desk, a table and a computer. My office is in Cambridge which is near to being at sea level. Estimate the total mass of all the air molecules in the office.

1kg 10kg 50kg ✓ 100kg None of the above.

Q.5 I have 28 black and 8 brown socks in my sock drawer. If it is completely dark and I cannot see the colour of the socks that I am picking, how many socks do I need to take from the drawer to be sure that I have at least one pair of socks that are the same colour?

✓ 3 4 14 18

Q.6 Without using a calculator, calculate 4020×3980

1,600,400 ✓ 15,999,600 16,000,000 16,000,400 None of the above

Q.7 Three male prisoners are sitting in a line one behind another. They are shown 2 red and 3 green hats, and a hat on is put on each man's head so that each cannot see his own hat, but can see the hats on the other prisoners ahead of him. As a result, the front prisoner cannot see anything; the middle prisoner can see the front prisoner's hat and the back prisoner can see the hats on both the front and middle prisoner. They are told that they will be set free if any of them can get his own hat colour right without communicating with any other prisoner. The front prisoner becomes aware that both the back and middle prisoners have chosen to remain silent. Assuming that all the prisoners make optimal logical decisions throughout the challenge, what is the best action that can be taken by the front prisoner?

Say that his hat is red ✓ Say that his hat is green Remain silent None of the above

Q.8 An unbiased cubic die has numbers 1 to 6 inscribed on each side. On average, how many rolls will you need in order to get a 6?

1 3 ✓ 6 8 None of the above

Q.9 Consider a large metal sheet, 5mm thick, with a 20cm diameter hole in the middle. You can assume that metal expands when heated. The metal sheet is placed in an oven and heated from room temperature to 100celsius. What happens to the diameter of the hole as the sheet is heated: does it decrease, increase or stay the same?

The diameter of the hole decreases

✓ The diameter of the hole increases

The diameter of the hole stays the same

Q.10 What is the minimum number of guests that need to be present at a party so that there is a more than 50% chance that two of them have the same birthday? Note that they do not necessarily have to be the same age; they just must have the same birthday. We can assume that a year consists of 365 days and that the probability of birth is equal for each day.

10 ✓ 23 188 366 None of the above